

朝日文楽の概要

文楽は、太夫・三味線・人形の三者の呼吸がぴったり合わなければなりません。しかも人形は3人が遣うのですから大変なことなのです。

さて、このような文楽が三瓶に誕生した源流を紹介してみよう。明治の初期、三瓶の井上伊助（1841生）という方が、松の瘤や桐の木で人形の頭を刻み、胴や脚を作り、衣装を着せて舞わしたのが始まりと言われています。戦時中は活動が一時途絶えましたが、戦後再び文楽復興の意欲を取り戻し、人形遣いに浄瑠璃にと精進したのです。その成果が認められ、人形頭や衣装道具が昭和34年県指定有形文化財に、更に昭和39年には県指定無形文化財に指定され、保持者として14名の方が認定されました。その後特筆すべきは平成8年ハワイ州知事さんからの要請で、ハワイで公演して万雷の拍手を浴びるとともに、第14回全国村おこし展示記念大会には、県商工会の推薦で東京において「三番叟」を演じたことです。現在、朝日文楽を物心両面にわたって援助して頂く西予市と朝日文楽保存会会員260名（内文楽会員30名）によって運営しています。



朝日文楽会館

県指定文化財である人形頭、衣装・道具一式等先人の労苦により継承されてきた朝日文楽保存会に対し、朝日文楽会では主に人形遣い・太夫・三味線に重きを置いています。日々の練習は言うまでもなく、県内五座が一同に会する「合同公演」、三瓶町で開催される「三瓶町文化祭」、その他



高校生による
「日高川入相花王渡し場の段」

三瓶高等学校に文楽部が誕生した経緯を辿ってみましょう。それは昭和39年2月「古き文化を知らずして新しい文化の創造はありえない」との観点から、時の校長先生が三瓶町に伝わる朝日文楽こそ三瓶の誇りうる伝統芸能であり、若い高校生たちがこの遺産に接することにより、先人

朝日文楽の活動

伝統文化の後継者を育成

特集3



朝日文楽保存会 理事長 山本 正吉

県内各地からの依頼による公演活動を実施しています。しかしながら、朝日文楽も多分にもれず会員の高齢化が進み、技術の伝承が喫緊の課題となっています。幸いなことに最近若者が人形遣いに興味を持たれ、文楽会に入って技を磨き、その成果を公演に発揮しています。このことは後継者育成の面で多大の成果だと自負しています。なお、会員のための指導ではなく、更に裾野を広げ、小・中・高の児童・生徒を対象とした伝統芸能継承の取り組みも古くから実施しています。



文楽会員による「絵本太功記十段目」

三瓶高等学校文楽部の誕生

特集 まだまだ、若い者には負けられん!!



淡路で披露した「壺坂観音霊験記」

していることに頭が下がります。

初舞台は昭和39年11月、松山の堀之内にある県民館での第六回合同公演で「新版歌祭文・野崎村の段」を演じております。その後県民文化会館に会場が移され、更に平成16年からは、会場を南予の文楽座の持ち回りとし、平成24年度で54回目の合同公演になります。その間一度も休むことなく文楽に情熱を注ぐ努力に感心します。現在まで数多くの外題を学び、文楽特有の義理・人情の世界を習得されたことでしよう。

特筆すべきは平成7年から3回にわたる兵庫県三原高校文楽部との交流です。24年には「後継者団体交流会」で、文楽の本場淡路に赴き、自分たちの演技を披露し、淡路の子どもの演技も見ることができ、感銘を覚えたようです。

の残した古典の「よさ」を味わい、彼等の人生のやりどころにしたいと考えられたのです。そこで、朝日文楽会に指導の要請があり、後継者育成の面からも良いとのことでの要請に賛同し、ここに朝日文楽研究会（後の文楽部）が誕生したのです。爾来今日まで約半世紀にも及ぶ長い間引き継がれて活動



人形遣いの練習に励むこどもたち

こども朝日文楽クラブの誕生

「子ども朝日文楽クラブ」は平成4年9月に「地域少年少女サークル活動推進事業」の一環として誕生したのです。学校週5日制が導入されたのを機会に、生活体験に乏しい今の子どもたちに、文楽の学習によって、郷土を愛する心や仲間意識が育ってくるのではないかとの思いから、町教育委員会並びに学校から朝日文楽会に要請があったのです。それ以来20年が経過します。

学習する文楽の外題は「傾城阿波鳴門・順礼歌の段」です。月2回、土曜日の午後文楽会館で悪戦苦闘の練習です。人形は重たいし、操作も難しい。しかし、老人ホーム

（三楽園・

みのり園）や町の文化祭に演じて、拍手喝采を貰ったときは格別の喜びを感じるようです。発表の機会是他に「鑑賞文楽」というのがあります。これは三瓶町に開催された「子ども議会」で「発表の機会が少ないので、私たちの存在も薄いし、練習にも意欲が湧かない。もっと発表の機会を作って欲しい。」との意見があり、平成12年度から町内小・



老人ホーム「三楽園」での熱演



鑑賞文楽で初舞台の2人

中・高の児童・生徒を対象に鑑賞会を行っています。

今後に期待

朝日文楽会では三味線・太夫の途切れたことがありました。平成12年に松山に開催された太夫・三味線養成講習会に参加し、その後の研修によって数名の太夫・三味線の後継者が誕生し、朝日文楽独自で公演が出来るようになりました。更には太夫希望の小学生や新入会員も現われ、先日の鑑賞文楽には初舞台として登場しました。人形遣いもかつて小・中学生や高校生の頃に体験した者、新しく文楽会に入って練習する若者等で朝日文楽も若返り、取り組みの成果がでてきています。

終わりに現在新しい会館の建設計画がなされています。完成の暁にはその会館を拠点として更に技術を磨き、継承発展に努力したいと思っています。